

Trauernde Frau

かな

哀しみの女

五木寛之



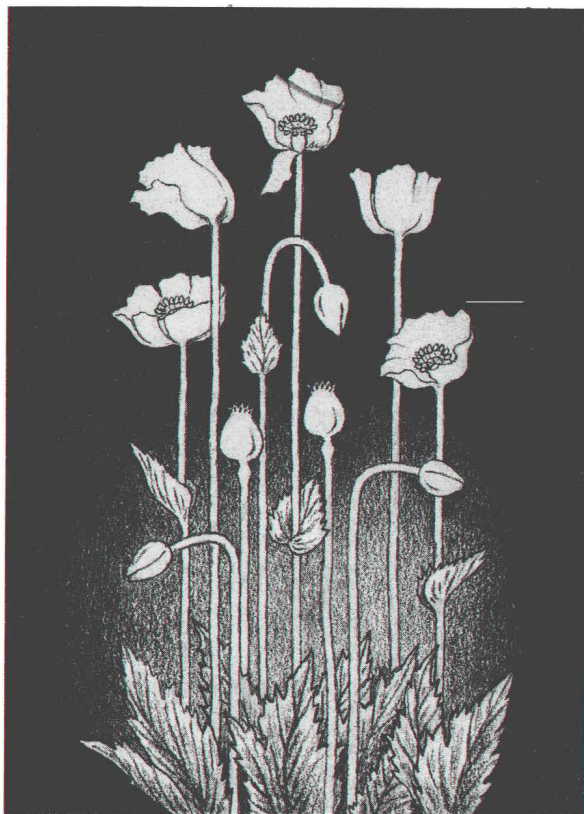
157

Trauernde Frau

かな

哀しみの女

五木寛之



新潮社

かな
哀しみの女

五木寛之



印刷 1986年11月5日

発行 1986年11月10日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162/東京都新宿区矢来町71/振替東京4-808

電話 { 業務部 (03) 266-5111
編集部 (03) 266-5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価880円

© Hiroyuki Itsuki 1986 Printed in Japan

ISBN4-10-301719-8 C0093

哀^{かな}しみの女

SHINCHOSHA

Ⅱ

その絵を見たとき、わたしは思わず、あ、と小さな叫び声をあげてしまった。その絵の中に描かれた女と、不意に視線が合ったような気がしたからである。

黒い服を着た、黒い髪の女だった。頭になにか黒い布のようなものをかぶっていた。面長の顔と水平な眉。頬から顎にかけては、削ぎとったように尖っている。どこかみだらな気配のただよう唇。そして、まるで湖のような大きな目。

そのかすかに赤らんだ目が、わたしをじっと絵の中からみつめたのだった。なにかを訴えるように悲しみの色をたたえた目。その目の下には不吉な隈がひろがっている。

「なんという絵だろう！」

と、わたしは思った。なんという悲しい女の顔なんだろう。そんな目を、わたしはこれまでも見たことがない。それにしても、どうしてこの絵の中の女は、わたしをじっとみつめて離さないのか。彼女はなにをわたしに伝えようとしているのか。

わたしはその絵から無理に自分の視線を引きはがそうと試みた。だが無理だった。わたしは鋏はさみを膝の横においたまま、絨毯じゅうたんにぺたんと坐りこんでしばらく動かなかった。いや、動けなかったといったほうが本当かもしれない。

どれくらいの時間が過ぎたのだろう。わたしはようやくショックから立ち直った。そして女の顔から目をそらすと、絵の下に印刷された小さな文字を読んだ。

〈哀かなしみの女 一九一二 油彩 42・5×34〉

それは週刊誌大の一枚の印刷物だった。いっしょに暮しんでいる章司宛しやうじにとどいた封筒の中に、折りこまれてはいっていたものだ。封筒の表には〈御招待〉と赤い判が押してあり、住所と宛名がワープロで打たれている。差出人は新宿の有名なデパートの宣伝部になっていた。

〈エゴン・シーレとウィーン世紀末展〉という文字が目立つところに刷つてある。

「エゴン・シーレ、ってなんだろう？」

と、わたしは思った。ウィーンが古い歴史をもつヨーロッパの街だということぐらいは、もちろん知っている。それと並んでいるところをみると、エゴン・シーレというのも外国の街の名前なのだろうか。

わたしは封筒の中から固い紙の招待状をとり出した。森戸章司様、と彼の名前が墨で書いてある。それを読みかけたとき、玄関のブザーが鳴った。反射的に壁の時計を見ると、午前二時をすこし過ぎていた。わたしは封筒をはかの郵便物と一緒にテーブルの上ののせて立ちあがった。

インタフォンの受話器をとると、章司の声が響いてきた。

「おれだ。はやくあけてくれ」

「いまいきまーす」

わたしは自分が無意識に明かるい声を出そうとつとめていることにいやな気がした。もう何時間も待ちくたびれていたのだ。こんなときにはごく自然に不機嫌な声を出せばいいのに。

ドアをあけると、章司の顔とぶつかりそうになった。酒の匂いもしないし、く

たびれた顔もしていない。

「タクシーできたの？」

「うん」

どことなく章司の声が固かった。嘘をついているんだな、と、わたしは思いながら、すぐ機嫌のいい口調になってしまう。

「おなかすいてるんでしょ」

「いや」

「なんだ、いっしょに食べようと思って我慢して待ってたのに。損しちゃった」

「ばかだな。おそくなるって言うておいただろう」

「うん」

章司は薄手のコーデュロイのパンツに、ざっくりしたミッソーニのセーターを着て、まるで金持ちの大学生のように見える。むかしは長髪だったのが、この数年、すこし短か目に切って額にかかるようにしているの、なおさらだ。体つきもほっそりして小柄なために、なお若々しい。三十四歳という立派な中年男とは、とても思えなかった。

「これ、どうしたんだ」

と、章司は居間のテーブルの横に立ってわたしの顔を見た。

「きょう届いた郵便物の整理してたのよ」

テーブルの上にさっきの招待状と、女の絵の印刷物とが置いたままになっている。章司はそれをつまみあげると、おれ宛の手紙類は勝手に開封するなど言っているだろう、と、不機嫌そうな声で言った。

「でも、差出人が個人じゃない場合は、開けていいって言ってたじゃない」

「ダイレクト・メールとか、そんなどうでもいい郵便物はそっちで開けてくれていいんだ。でも、大事な手紙はおれが開けるよ」

「ごめんなさい」

わたしは謝りながら、心の中で、どうやって大事か大事でないかを封筒の外から見分けるのかしら、と、つぶやいた。

「おこったのか」

と、章司がわたしの顔をみて言った。七年間もいっしょに暮していると、ほとんどお互いの気持は筒抜けになってしまう。章司はことにそういう点では、のろ

まなわたしよりはるかに敏感だった。

「べつにおこる理由なんかないもの」

「だったら笑えよ」

わたしは章司のほうへかすかに頬笑^{ほえ}んで見せた。

「これでどう？」

「まあいいや。許す」

「ありがとござえやした」

わたしはふざけた口調で頭をさげると、機嫌をなおしてソファアに腰をおろした章司の横に、並んで坐った。

「ね、エゴン・シーレって、なに？」

「え？ 知らないのか」

「だから聞いてるんじゃないの」

章司はさっきの女の顔が刷られた印刷物を裏返しにして、わたしの顔を見た。

「ここにくわしく書いてあるだろ。読まなかったのかい」

「その封筒をあけたところへシヨージが帰ってきたのよ」

エゴン・シーレというのは、ウィーンの画家の名前なのだ、と、彼は言った。

「その人、生きてるの？」

「ばか。何十年前に死んでるよ」

「わたし、知らなかった。有名なの？」

「まあな。最近じゃ若い連中のあいだで、ちょっとしたブームらしいが」

章司はその招待状を封筒にしまつて、背後の棚の上に置いた。

「腹へってるんだつたら、そつちだけ食えよ。おれはもう寝るから」

「いいの。がまんするわ。これ以上ふとると、またショージに叱られるもの」

それは本当だった。高校時代にはバスケット部にいて、身長だけが目立つ瘦せ

つぼちの娘だったのに、三十歳を過ぎてからめつきり体に厚みが出てきていた。

小柄な章司と並ぶと、わたしのほうがはるかに豊かに見える。章司がわたしと街

を歩くとき、少し離れて歩こうとすることに気づいたのは、二年ほど前のことだ

った。

「この絵、すごいわね」

わたしは章司が封筒にしまわずに残した印刷物を指でおさえて言った。

「こんな絵、はじめて見るわ」

彼は黙っていた。わたしは馬鹿なことを言ったと、すぐ後悔した。仕事の分野はちがっていても、彼も絵を描く人なのだ。どんなときにも彼はわたしが他人の作品をほめたりするのは好きではない。だが、なぜかわたしは引き返そうとしなかった。たぶん気持のたかぶる時期だったのだろう。

「わたし、この絵の本物を見てみたいわ。招待日にいっしょに連れていってもらえない？」

「驚いたな」

と、彼は本当にびっくりしたような顔で言った。

「きみは絵なんかには、まったく関心のない人だと思ってたのに」

「そうなの。わたしは昔から美術音痴なんだから。でも、この絵だけは、どうしても見たいの。だめかしら」

「招待状は本人限りだぜ」

「同伴は一名様まで、って書いてあったわ」

章司はしばらく黙っていた。それから、おれはこの日は行けないと思う、と言

った。

「エゴン・シーレにあまり関心もないしね。きみがどうしても見たければ、一般公開のときに行つてこいよ」

「そう。だったら、自分で行くわ。これ、いただいていい？」

「そんなこと言つて、どうせ行きやしないくせに」

わたしは不思議な女の絵が印刷された紙を引きよせて、丁寧にたたんだ。(哀しみの女)の目が、ちらとわたしにウインクしたようだった。変つてゐるな、きみは、と、章司は頭をふると、ひとつ大きなあくびをしてみせ、さも眠そうに寝室へ姿を消した。

わたしはたたんだ印刷物をもう一度ひろげて、展覧会のスタートする日を探した。初日は一週間後の金曜日だった。オープニングのパーティは、その前日の六時からデパートの会場で行われることになっている。

章司はきっとそのパーティに出席するにちがいない、という予感がした。彼は有名な人の集まる場所へわたしを連れてゆくのが、気が進まなかったのだろう。その気持もわからないではなかった。有名な画家の名前も知らないような女をパーテ

イの席に同伴するのは、彼でなくとも嬉しくはあるまい。

いいわ、自分で行けばいいんだもの、と、わたしは口の中でつぶやいて立ちあがった。折角つくった牡蠣^{かき}雑炊^{ぞうすい}を無駄にするわけにはいかない。でも、なんとかもう三キロは痩せなくては。

わたしは自分の勝手な考えに苦笑しながら、キッチンのドアをあけた。

深夜放送のテレビを見ながら、ひとりだけの食事をした。そういうことにはなれっこになっているので、淋しいとは思わない。

テレビは、ヨーロッパの街の花祭りのニュースを流していた。まだ三月にもなっていないというのに花祭りをするというのは、よほど南の暖かい国の街なのだろうか。それでも沿道の群衆の中には、毛皮のコートを着た女たちの姿も見えた。食事を終わるとテレビを消し、後片づけをして顔を洗った。わたしは昔から、肌の手入れというものをあまりしたことがない。寒い土地で育ったせい、皮膚がじょうぶで、かなり不規則な生活がつづいても、いつもつるつとした光沢のある肌をしていた。

いつだったかそのことを章司に話したら、彼は笑って、要するにカズは鈍感なんだよな、神経質な人間ほど肌が荒れるっていうじゃないか、と言った。

こうして鏡にうつった自分の顔を眺めていると、たしかにそうかもしれない、という気がしてくる。さっき見たエゴン・シーレとかいう画家が描いた女の顔とは、まるで大ちがいだ。三十九歳という年齢のわりには翳^{かげ}りのない平板な顔。

章司はよくベッドの中で、カズとこうしていると白い大きなウサギを抱いてるような気がするんだな、と言っていた。

「いいわ。どうせわたしは、わたしなんだから」

手の切れるように冷たい水で最後にもういちど顔をゆすいで、わたしは寝室へ行った。眠っている章司を起こさないように、そっとドアをあける。できるだけ慎重にやったつもりなのに、ガシャリと金属質の音がして、わたしは狼狽^{ろうばい}した。

暗闇のなかに章司の寝がえりをうつ気配があり、ぶつぶつ言う声がきこえた。

「うるさいなあ、もう。カズは平気で大きな音を立てるんだから。やっと眠れそうになったところだったのに」

「ごめんなさい」

ほんとにそうなのだ。何ごとにつけ器用な章司は、ほとんど音を立てずにドアをあけしめするというのに。わたしは大きな体を小さくして自分のベッドの中に体をすべりこませた。

「いま何時ごろだい」

「三時をすこし過ぎたくらいかしら」

章司は大きなため息をつく、まだ眠そうな声で、こっちへこいよ、と言った。わたしたちは、すこし幅ひろのベッドを二つならべて寝ていた。

二年前にこの中目黒のマンションを借りたとき、章司はダブルベッドを入れようと言ったのだが、わたしが頼んでそうしてもらったのだ。わたしは昔から、章司と体をくつつけて眠っているときに、いつもなんとなく肩身のせまい思いをしていた。章司よりわたしのほうがうんとひろくベッドを占領しているような気がしていたからである。

「こっちへこいしたら」

章司の声がすこし大きくなった。

「いいの。疲れてるんでしょ？」